

中央アジアの仏教寺院を掘る(2)

—キルギス共和国、アク・ベシム(スイヤブ)遺跡・大雲寺推定地北側の調査—

岩井 俊平 龍谷大学龍谷ミュージアム准教授

枡本 哲 元・大阪府文化財保護課技師

國下多美樹 龍谷大学文学部教授

Excavating the Buddhist Temples in Central Asia (2): Investigation of the Northern Side of the Estimated Dayunsi Temple at Ak Beshim (Suyab), Kyrgyz Republic

IWAI, Shumpei Associate Professor, Ryukoku Museum, Ryukoku University

MASUMOTO, Tetsu Former Archaeological Researcher, Cultural Property Preservation Division, Osaka Prefecture

KUNISHITA, Tamiki Professor, Faculty of Letters, Ryukoku University

1. はじめに

キルギス共和国のチュー川流域には、6～7世紀頃にシルクロードを通じて仏教が伝えられ、都市遺跡であるアク・ベシムの中にも、3つの仏教寺院址が存在している。龍谷大学は、このうち第2仏教寺院址(AKB-18区)において2022年に発掘調査を実施し、人工的に粘質土を積み上げた「積み土遺構」を検出した。2023年は、この地点の調査を継続して行う予定であったが、用地の借り上げに関する問題が発生し、調査継続は不可能となってしまった。そのため、本年は急遽、別の寺院(第0仏教寺院址と呼ばれる)が存在したと考えられている地点(AKB-0区、A. N. ベルンシュタムが1939～40年に発掘)の北側に複数の試掘調査区を設定し、キルギス共和国国立科学アカデミーと共同で当該地域の発掘調査を行った。

2. 調査地点と調査の目的

今回の調査区は、新たにAKB-20区と命名された。場所は第2シャフリスタンの南西部で、帝京大学の調査により中国式の石敷きや大量の瓦が発見され、唐の軍事拠点・碎葉鎮の中心部と考えられるAKB-15区からは南西に約250mの地点である(図1)。先述のとおり、本調査区の南側には第0仏教寺院址(AKB-0区)があったと報告されている。発掘者のベルンシュタムは、この遺構を中世(当初は11～12世紀、のちに9～10世紀)の仏教寺院と位置付けたが、中国風の仏像の断片や瓦が多く出土していることを考慮すれば、

ここには、もう少し古い中国式の仏教寺院が存在していたと考えられる。実際に、タラス河畔の戦い(751年)に参戦した杜環の『経行記』に「大雲寺が建てられており、まだ残存していた」と見え、この中国式の寺院は、武則天が唐の各地に建造させたことで知られる「大雲寺」の一つであった可能性が極めて高い。

そのため、AKB-20区の調査は、今後の大雲寺の本格的な再調査の先駆けとなるものと言えよう。2023年の調査は、この付近の土層の堆積状況を確認し、周辺の基礎的な地形的・土壌的な情報を得ることを目的として行われた。

3. 調査の概要と出土遺物

AKB-20区は、北東から南西方向に広がる幅11m×長さ100mほどの範囲で、現在も耕作が行われている畑の中にある。ここに、計8か所の試掘グリッドを設けて土壌の堆積状況を確認した。各グリッドの位置は図2のとおりである。なお、グリッド4・6・7は最終的に連結している。本稿では便宜上、北東—南西方向の軸を「東西方向」と呼び、北西—南東方向の軸を「南北方向」と呼ぶことにする。

グリッド1は、南北3m×東西5mの調査区。大型の溝が検出されたが、その掘り込み面は中世の土器が出土する層であるため、大雲寺の「堀」に係わるかは不明である。

グリッド2は、南北3m×東西5mの調査区で、全体を地表下2mまで掘り下げたのち、地山確認のため中心部分をさらに地表下3.7mまで掘り下げた(図

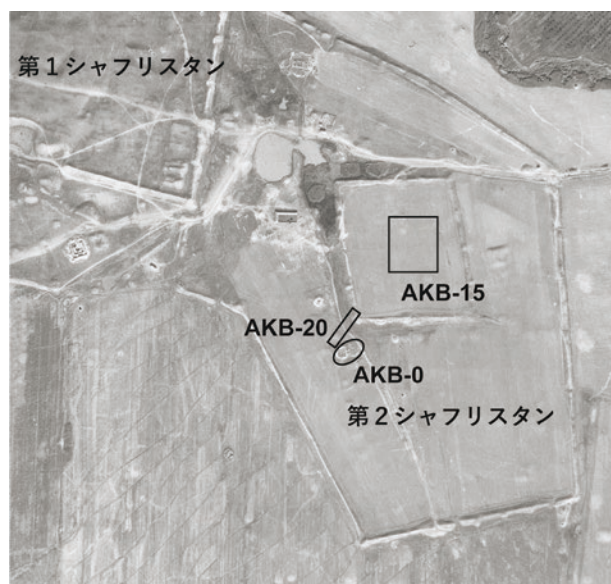


図1 1966年の航空写真に基づく調査区の位置

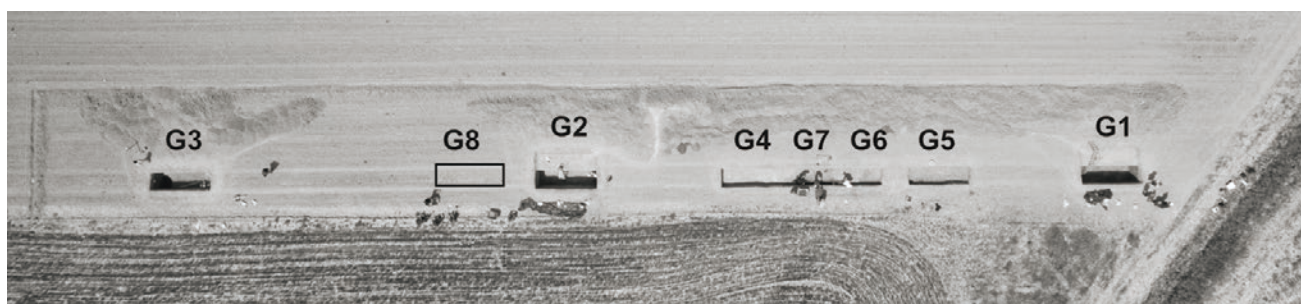


図2 AKB-20区の調査グリッドの配置



図3 グリッド2の完掘状況(北西から)



図4 グリッド2南壁断面(上層・下層の位置関係は誤差を含む)

3・4)。地表下80 cmほどの高さで、灰白色の薄く堅緻な層が2～3層重なる床面状の層位を確認した。この層の下層からも中世の土器が出土するため、中世以降の何らかの居住痕跡と考えられる。地表下2.2 m(標高約810.9 m)より下層では、瓦・埴および灰色土器(後述)の破片を含む土層となり、ここからは中世の土器が出土しないため、碎葉鎮時代の土層である可能

性が高いが、遺構は検出されなかった。また、地表下3.7 m(標高809.4 m前後)で確認された地山は灰緑色の粘質土であった。

グリッド3は、南北3 m×東西5 mの調査区。東側に中世の土器を多く含む大きな土坑があり、西側にはさらに新しい(おそらく近代にも使用されている)土坑が確認された(図5)。この近辺が、中世以降に生活で

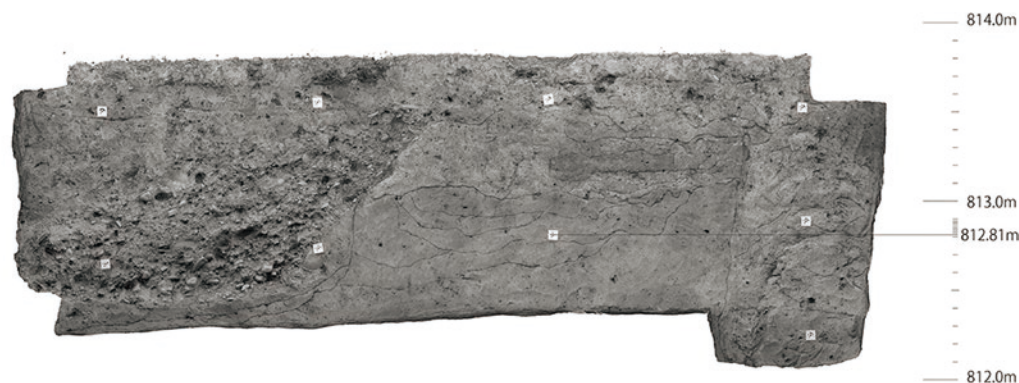


図5 グリッド3南壁断面



図6 グリッド3東側土坑から出土したコイン

出たごみを廃棄する場所であったことを示している。

グリッド4・6・7は、当初別々に設けられたが、最終的には一つのグリッドとなった。南北1.5m、東西11mを測る。中心付近で溝が確認されたほか、西側では不明瞭ながらグリッド2で確認されたのと同様の床面状の層位が検出された。

グリッド5および8においては、遺構は検出されなかった。

各グリッドからは土器・瓦・磚・動物骨が出土しているほか、少量の青銅器片・鉄器片・銅貨(図6)も確認された。なかでもグリッド1および3の土坑からは多くの遺物が出土し、土器の多くは9～10世紀のものである可能性が高い。さらに、グリッド2の下層(標高約810.9m以下)から、2点のみ堅緻に焼成された灰色土器の破片が出土した。この土器は、碎葉鎮時代の土器の可能性が示唆されており(城倉他2017)、グリッド2下層の年代を示す可能性がある。

4. 石製台座について

グリッド6に相当する地点の耕作土直下(地表下約50cm)から、石製の彫像台座の破片が出土した(図7・8)。残存高は13.9cm、復元された胴部直径は約

34.4cmで、上面の方が大きい逆円錐台の形態となるが、上面部は残存していない。台座側面には、下方に垂れた複弁蓮華文が浅く浮彫され、底面にはノミ状の工具で平らに削った痕跡がそのまま残されている。使用されている石材は、暗赤色の堅緻な堆積岩で、これまでアク・ベシム周辺で発見されている唐風彫刻や、本年の帝京大学による調査で出土した漢文碑文断片と同一である。

このようないわゆる「蓮華座」は、広くユーラシア地域に認められるもので、かつてAKB-0区から出土した唐風の彫刻の中にも存在している(森2020)。一方で、本作例の複弁蓮華文は、これまでアク・ベシム遺跡周辺で出土した作例と比較して写実的な形態をよく残している。第2シャフリスタンが唐の碎葉鎮であったことが事実となった現在、こうした石彫が唐の彫刻の影響下で制作されたものであることは明らかである。したがって、本作例も同じ時代の一連の彫刻と考えることが可能で、AKB-0区が、唐人によって7～8世紀に造営された大雲寺(あるいは少なくとも造立に唐人が関与した唐式の仏教寺院)であったことを示す証拠の一つと言えるだろう。

5. 調査成果と今後の展望

以上のとおり、2023年のAKB-20区の発掘調査においては、9世紀以降に属すると思われるいくつかの土坑・溝を検出したほか、碎葉鎮時代に関連すると思われる仏教彫刻の台座片が出土した。また、グリッド2の調査から、調査地周辺においては中世に属する層が非常に厚く堆積しており、地山には地表下約3.7m(標高約809.4m)で到達した。この事実は、AKB-20区付近が、すでに7～8世紀頃からかなり低い土地であった可能性を示唆しており、遺跡全体の土地利用を



図7 石製台座



図8 石製台座の底部

検討していくうえで重要な情報となる。大雲寺推定地である AKB-0 区と関連する外壁や濠のような遺構は検出できなかったものの、今後は両地区の違いに焦点を当てることで新たな知見が得られる可能性があるものと考えられる。

最後に、共同で本調査を実施してくださったキルギス共和国国立科学アカデミーのバキット・アマンバエヴァ氏をはじめとする同国関係者に感謝を申し上げたい。なお、本調査は科学研究費補助金・基盤研究(B)「中央アジア仏教遺跡の多様性の形成過程に関する考古学的研究」(代表：岩井俊平)および基盤研究(S)「シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷—農耕都市空間と遊牧民世界の共存—」(代表：山内和也)による成果の一部である。

参考文献

- ・ Бернштам, А.П. (ред.) 1950 *Труды Семиреченской Археологической Экспедиции Чуйская Долина. Материалы и Исследования по Археологии СССР*, No. 14, Москва и Ленинград, Издательство Академии Наук СССР.
- ・ 加藤九祚 1997『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』シルクロード学研究4 シルクロード学研究センター。
- ・ 川崎健三・山内和也 2020「ベルンシュタムによるアク・ベシム遺跡シャフリスタン2の発掘調査」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集 215-245頁。
- ・ 城倉正祥・山藤正敏・ナワビ矢麻・伝田郁夫・山内和也・バキット アマンバエヴァ 2017「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘(2015年秋期)調査出土遺物の研究—土器・埴・杜懷宝碑編—」『WASEDA RILAS JOURNAL』No. 5 146-175頁。
- ・ 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー 2021『アク・ベシム(スイヤブ)2018』
- ・ 森美智代 2020「キルギス共和国チュー川流域出土の唐風石造仏教彫刻」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集 159-175頁。